

脳血管外科医が担う抗アミロイド $\beta$ 抗体薬治療—今までの経験をこの治療へ—

鈴木脳神経外科 院長 / Neuroscience center センター長  
鈴木 海馬

近年、抗アミロイド $\beta$ 抗体薬の登場により、アルツハイマー型認知症治療は症状緩和を目的とした治療から、疾患そのものの進行を抑えることを目指す時代へと大きく変化している。一方で、本治療では適切な患者選択に加え、ARIA (Amyloid-Related Imaging Abnormalities) の評価・管理が欠かせず、安全な治療を継続するためには、MRIを中心とした画像診断と適切なフォローアップが重要となる。

脳血管外科医は、脳卒中診療を通じて、微小出血や脳表ヘモジデリン沈着、白質病変、脳梗塞などの画像評価を日常的に行い、抗血栓薬内服患者や脳血管障害既往例のリスク評価、急性神経症状出現時の鑑別診断などを数多く経験してきた。こうした知識や経験は、抗アミロイド $\beta$ 抗体薬治療におけるARIA-EやARIA-Hの早期発見や適切な対応、安全な治療継続を支える上で大きな力になると考えている。また、患者さんやご家族への十分な説明、治療継続の意思決定支援、副作用発現時の迅速な対応なども、安全な診療を支える重要な役割である。

当院では、アミロイドPETや髄液検査による病態診断、高性能MRIを用いた画像評価、投与後の定期的な安全性モニタリングに加え、地域医療機関との連携を含めた一貫した診療体制を構築している。脳神経外科クリニックだからこそ可能な迅速な診断・治療導入と、画像診断を軸とした安全管理を実践し、多くの症例を経験する中で、日々新たな学びを得ている。さらに、多職種と密に連携しながら、安心して治療を継続できる環境づくりにも取り組んでいる。

抗アミロイド $\beta$ 抗体薬治療は、新しい薬剤を投与するだけでなく、画像診断、安全管理、多職種連携、地域医療連携を組み合わせながら患者さんを長期的に支えていく医療である。本講演では、「脳血管外科医が担う抗アミロイド $\beta$ 抗体薬治療—今までの経験をこの治療へ—」をテーマに、脳卒中診療で培ってきた経験がどのようにこの治療へ生かされているのかを実臨床を交えて紹介し、脳血管外科医だからこそ果たせる役割と、これからの認知症診療への可能性について皆様と考えてみたい。

## 略 歴

|                                  |                                                              |
|----------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| 2010年 埼玉医科大学国際医療センター<br>初期研修医    | 2019年 埼玉医科大学国際医療センター<br>脳卒中外科 講師                             |
| 2012年 埼玉医科大学国際医療センター<br>脳神経外科 助教 | 2024年 埼玉医科大学国際医療センター<br>脳卒中外科 准教授                            |
| 2013年 虎の門病院 脳神経外科 医員             | University Hospital Zurich, Department of<br>Neurosurgery 留学 |
| 2014年 国立循環器病研究センター<br>脳神経外科 医員   | 2025年 医療法人千清会 鈴木脳神経外科 院長<br>Neuroscience Center センター長        |
| 2015年 東京都立神経病院 脳神経外科 医員          |                                                              |
| 2016年 埼玉医科大学国際医療センター<br>脳卒中外科 助教 | 現在に至る                                                        |

## ■所属学会・資格：

医学博士、日本脳神経外科学会専門医・指導医、日本脳卒中学会専門医・指導医、  
日本脳卒中の外科学会技術認定医・指導医、日本脳神経外科認知症学会認定専門医、  
日本脳ドック学会認定専門医、厚生労働省認知症サポート医